

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail: daimao@travelmitra.jp)

霧が覆い隠すシッキム王国の「神秘」 (9)

まずは、前号で告白したように、わが輩の失敗談から話を始めよう。

昨年 2024 年 7 月に大阪大学で出版記念会があった。タゴール暎子さんの『インド探訪』(論創社) がヒンディー語に翻訳された。新タイトルは『メーリー・バーラット・ヤートラー』である。「私のインド旅行記」とでも訳せようか。翻訳者は虫賀幹華助教である。『インド探訪』は数年前に暎子さんから贈呈されて読んだ。この翻訳本は、ニキレーシュ・ギリ総領事の発案と尽力による「記念本」(非売品) である。領事館からの問い合わせがあった時のわが輩の記憶では、当初暎子さんか愛娘が英訳して出版するという話であった。それは容易な作業ではないので、水泡に帰したと思っていたら、ヒンディー語訳が製本されて驚いた。

『インド探訪』によると、1989 年末に暎さんはツアーを組んでダージリン、カリンポンを訪問している。日本語ガイドはわが輩の旧知サルカールさん(カルカッタ在) であった。あの頃は入域許可が必要であった。暎さんは、どうしても行きたい所があった。それが「詩聖タゴールの旧別荘」(チットラ・バヌ) であった。

「昔は『チットラ・バヌ (太陽の絵)』と呼ばれていたが、今は『ガウリプル・ハウス』として知られている」(P. 49)

京都の美術写真家・野村直太郎は、戦前(1938 年) に日本政府の要請でガウリプル・ハウスを訪れ、この別荘のベランダでタゴールとの写真を撮っている。『インド探訪』にもその写真が掲載されている。「赤い三角屋根、白い壁、飾り窓、バルコニー、どれも野村氏の写真にあった通りである」と暎さんは記している。

わが輩も見た。全くその通りの大邸宅であった。CROOKETY の館主、路行く人、サルカールさんの案内、『インド探訪』、野村の写真、これほどの証言証拠がそろっていれば、誰だって「タゴールのガウリプル・ハウス」だと思ってしまう。

ただ一つ気になったことがあった。改修中の大邸宅の案内板にタゴールの「タ」の字も明記されていなかったことである。それでも数名の観光客がきていたので、一般的に「タゴールのガウリプル・ハウス」として認知されていたのであろう。風評に無防備なわが輩は疑うことなく、帰国後に某タゴール研究者にメールに写真を添付して送った。

そこで意外な事実が判明した。

「この写真は間違いなくゴウリプル・ボボン (Gouripur Bhavan/House) だと思いますが、チトロ・バヌ (Chitrabhanu) は別の建物で、Google マップで見ると、そこから 1 キロほど西にあります。添付の写真の、二階建ての建物です」

(えッ、エええ・・・！！！)

確かに Google マップで検索すると、「チトラ・バヌ」が別にあった。CROOKETY から 2.5 キロほど下ったところにあった。小規模の建物だがこ洒落た別荘である。

ガウリプル・ハウスはタゴール家のものではなく、ガウリプル (現バングラデシュ) の大地主ブラジェンドラ・K・R・チョードリーの別荘で、タゴールは賓客として短期間滞在しただけであろう、とのことであった。タゴールの死後 (1941)、タゴール家の人たちは「チトラ・バヌ」に滞在していたと思われる。

「チトラ・バヌ」はタゴールの長男ロティンドラナートが建てたもの (1943 年 8 月) で、彼の死後は、妻のプロティマが酷暑期の別荘として滞在していた。つまり、中根はガウリプル・ハウスではなく、チトラ・バヌに下宿していたのである。

「おお！ My mistake!」

ところで、「チトラ・バヌ」を何と訳すか。『インド探訪』には「太陽の絵」と訳されている。サンスクリット語の「チトラ」は絵画、「バヌ」は太陽、輝けるものなどの意味がある。某タゴール研究者は「様々に光り輝くもの」、すなわち「太陽」と訳している。長男がシャンティニケータン大学に持っていたスタジオも同じ名前だそうである。

某タゴール研究者はカリンボンに行ったことがないそうである。前述したように、山下幸一も、暎子さんも、某タゴール研究者も、CROOKETY についてご存知なかった。タゴール派の方は、タゴールにしか関心がないのであろうか。

実はレーリッヒ一家とタゴール・ファミリーとは関係があった。その分流は「日本」につながり、わが輩と薄い接触があった、ということを書いてみたい。それは衆知のラビンドラナート・タゴールの本流とは全く別ものである。

レーリッヒ夫妻には二人の息子がいた。ジョージと次男スビャトスラフ (1904～1993) である。次男は画家・建築家であった。彼の妻が女優デーヴィカー・ラーニー (1908～1994) である。彼女は先夫ライの没後に再婚した。デーヴィカーの母方の祖母イドゥマティーがタゴールの姪にあたる。幅広い系図でいえば、傍系だがデーヴィカーもタゴール・ファミリーの一員である。彼らは結婚後ナーガルに住んでいたが、のちにバンガロールに居を定め貿易会社を設立した。

1993 年にスビャトスラフが亡くなり、次いでデーヴィカーも亡くなった。さて、子供のいない彼らの遺産 (絵画) はどうなるのか。秘書に遺贈されたにもかかわらずインド政府とロシア政府と秘書の間で裁判沙汰になった。その秘書はメリー・ジョイス・プーナンチャという。あるとき甲南大学講師のインド人女性に裁判の話をしたら、彼女はびっくりした。

「なぜ、あなたはそんなことを知っているの？ その秘書は私の姉です」

彼女も驚いたが、私の方がもっとびっくり仰天した。ヒマラヤとバンガロールと日本が急に縮図されたような感覚だ。世界は狭い。故に人はどこかで繋がっている。